

明治三十四年の十月十三日に、この大学が東京へ移転した。それから、明治の終わり、明治四十四年の七月まで東京にありました。この学園を一身に引き受けて東京へ移し、そうして、みんなの人に推されて真宗大学の学長の地位につかれた、その方が清沢満之先生。その清沢先生が、いま、わたくしが題目として掲げたことを、お話のなかで問題として、われわれ学生に与えられた。

これは、従来、如来ましますがゆえにわれわれは信じなければならず、また、信ずることができると、こういうふうにほとんど決まっておるものだ、こういうふうに考えておった。しかるに、清沢先生は、いったい、そういうものであるか。あるいは、われわれ人類の願い、すなわち、われわれ人類の信心というものの、その要望にこたえて如来があらわれてくださったものであるのか。どういふものであるか。こういうように、一つの問題として、われわれに教えられたことであります。

まず如来がましますからわれわれが信ずることができるのか、信ずるのか。われわれの方に、われわれの人生における根本的な要望というものがあって、それにこたえて如来があらわれてくださったのであるか。如来が先であるか、われわれが先であるか。如来の本願が、如来の本願の救済が先であるか、われわれ機の、われわれの信心の要望が先であるか。そういうことを、われわれは一つ考えていこう。こういう問題を与えられた。(中略) 明治三十四年から三十五年の間に、とにかく、そういう問題を掲げて、みんな考えていた。つまり、わたしはその頃は、三十にならない。二十七歳から二十八歳。それが、今年は、数え年で九十一歳。その間全く忘れておったようなものである。もし思い出さなければ、全く忘れておったということになるわけですけれども、しかし、思い出した。(中略) 忽然として思い出した。もし思い出さんで死んでしましたら、全く忘れていたんだけれども、思い出したということを考えますというと、それは、忘れておったのでないのでしょうか。やはり、この心の深いところ、いわゆる深層意識とでもいうのでありまするか、とにかく心の深いところに、先生の掲げられた問題、そういうものが生きておった。生きておって、そうして自分を育てた、自分を指導してくださったのにちがいない。

清沢先生の教えというものは、お前は如来あるがゆえに信ずるのか、また、われわれが如来を求めるがゆえに如来があらわれたものか、どういふものか。それを、われわれに、考えてみよと。しかし、これは、結局決めることはできないのでしょうか。決めることができたときには、自分は死んでしまっている。また、死んでしまいうたからというて、決まったというわけではないのであります。これあるがゆえに、こういう問題をもっているから、今日まで歩かせていただいた。

資料2 「地上の救主」

私は昨年七月上旬、高田の金子君の所に於て、「如来は我なり」の一句を感得し、次で八月下旬、加賀の暁鳥君の所に於て「如来我となりて我を救ひ給ふ」の一句を回向していただいた。遂に十月頃「如来我となるとは法蔵菩薩降誕のことなり」と云ふことに気付かせてもらひました。こんなことは他の御方々には何でもないことであらぶが、二十年来脳の病に苦められ、心意常に散乱妄動し、日々聖教読誦を課業としながら、さらにその意義が分らず、特に近來浮世の下らぬ問題に迷悶しつゝある所の私には、誠に千歳の闇室を照すの燈炬を得た心地がしたのである。私は此氣分を発表する力がないのである。しかし黙しても居られぬ所から、昨年の十月以後、『暴風駛雨』の条下にその一端を表白し置いたのであつた。又本年一月発刊の『無尽燈』に「久遠の仏心の開顕者としての現在の法蔵比丘」と題したる一文を掲げてもらつたのであつた。然るに遠近の道友より、深く同情を得、又色々疑問を提出せられ、自分は恐懼の至りである。自分は今さらに己れの大胆にして驕慢なるに驚き、又わが思慮の輕薄なるを悲歎せざるを得ないのである。顧みれば己れは元來無一物の身で、多くの道友を通じ、特に自分が輕蔑し憎厭しつゝある人々を通じて、過分の恩寵を回向して下されたことに今更深く感銘するものである。(『選集』二409頁)

資料3 一一三、真宗教義の三大綱目

真宗教義は高くして卑く、遠くして近い。余は此を左の三大綱目に依りて指示し得ると信ずる。

一、我は我也、

二、如来は我也、

三、(されど) 我は如来に非ず。

則ち第一綱目は是れ我々人間の久遠自性の叫びである。我等は一面には此に依りてその虚栄心を充足しつゝ、而も此我執に拘束せられて、無辺の天地に徬徨し得ざるを苦しむ。此れ徒に「我の我」たる現相に拘執して、「我をして我たらしむる原動力」即ち自覺的自我の真主觀の何たるやを知らざるに由る。即ち徒に「我を我とし」て「如来を我とする」を知らざるに由る。かくして真宗の第一大綱は入道の門として第二大綱に達す。爾るに人は「如来は我也」即ち如来が我となり給ふ不思議の信念をあやまり、主客顛倒して「我は如来也」自己が本来如来なりと沈執するものなきに非ず。此れ則ち顯正的なる第二大綱より、破邪的なる第三大綱を生ずる所以である。

而も吾人にして「我の如来に非ざる」を知れば、初めて我は依然たる久遠の凡夫の我なるに驚くべし。此れ第三大綱より再び第一大綱に帰るものである。

かく三大綱目は第一に初まりて、復第一に帰り、無窮に巡環して尽くる所がない。此れ唯此三大綱目を以て略真宗教義を表現し得んと揚言する所である。

而も第一綱目は第二綱目の門戸としては、「我は単なる我」に過ぎざりしかども、一度第二第三の両綱を通過して第一綱目に帰る時、「我は我也」とは一面には自己が依然として久遠劫来の凡人なるを示すと共に又「我は如来の我也」「我は仏凡一体の我也」てふ意義をも彰顯する。

第一綱目は自覚であり、第二綱目は信仰である。前者は我の深信であり、後者は法の深信である。前者は俗諦門であり後者は真諦門である。

真に「我は我也」の意義に徹底せん為には必ず「如来は我也」の信念に入らざるを得ない。然らざれば人は滔々として邪見に陥らねばならぬ。又真に「如来は我也」の信念に徹底せんには必ず「我は我也」の自覚に反らねばならぬ。徹底せざる観念的信念は徒に自己を如来とする驕慢とならねばならぬ。

「我は我也」の命題と、「我は如来也」の命題とは實際上一致することが出来ぬ。唯夫れ「我は我也」「如来は我也」の二命題は実質上不可思議の調和を有する。

而して真宗の絶大の綱目の第二に存するは云ふまでもなきことである。（『選集』四352～353頁）

資料4 序

わが論集第一巻『救済と自証』が出てから、まさに二年になんなんとして、第二巻は『地上の救主』の題目を以てここに刊行せらるることとなった。第一巻には私が大正五年の晩秋に再度上京して以後の分を収めたが、今此巻には朔って明治四十二年から大正三年頃までに、雑誌『精神界』にかかげたものを収めることにした。これは出来得べくんば第一巻だけに止めるがよいといふ考があつたからである。

簡単に云へば本巻は第一巻に達する思想的段階に過ぎないと考へらる。しかし思想の無限の白道を歩行すると信ずる私には、過去の自己の云何なる文字思想の上にも明らかに現在の自我の声を聞き得るものである。現在を離れて、云何なる過去も私にあっては存在しないのである。（中略）

顧みれば本巻に収むる所は明治の末葉から大正の初期にわたり、特に明治の末年はわが祖師親鸞の六百五十回の遠忌に正当し、かつわが母校真宗大学は此年を以て京都に移され、先師清沢の遺業なる浩浩洞の瓦解の遠因をなした。さればその前半は真宗大学の教壇に立つの余暇に、同人と議論談笑しつつ、その折々の感想を録し、その後半は郷里北越の草庵にあって四方の師友を憶念し、そのやるせなき感懷を洩したのである。その内容について云へば私は初め『観経』を一貫せる「仏心大悲」の教説を讃仰し、それが上に開顕せられたる第十九の願、臨終来迎の本願を憧憬して止まなかつた。しかしながら私はこの『観経』の隱彰の実義なる弥陀大悲本願を徹底して、遂に因位法蔵菩薩の自証に進まずに居られなかつた。巻中の「地上の救主」の一篇は正しくこの自証を讃仰したものである。

もとよりその自証は微光であつて、到底独我論なる自性唯心の境を出で得なかつたに違ひない。しかしながら世は滔々として、神話宗教として法蔵菩薩を冷笑せし間にあって、独りその上に地上の救主の意義を見出したこと、而して爾来わが真宗教界に於て漸く法蔵の名を聞くに到つたことはこよなき喜びである。是れ則ちこの一篇の題を拡めて一卷の総題とせし所以である。 大正十三年三月 曾我量深

（『選集』二459～461頁）

資料5

仏のおたすけ「救い」と云う事を教えるところの浄土真宗の教、救済を内容とするところの浄土真宗の仏法は単に仏に救われると云う事だけでなくして、その仏の教えを通じて仏の自覚に到達するのである。普通一般に仏法に自力、他力の教えがあり、自力は自覚自証の道、他力は仏の救いを教えると考えられているが、その時に於て（これは明治時代以来の事であるが）浄土真宗（仏教）の教えは、単なる救済の道にあらずして、救いを契機として仏の自覚に到達するのであると私は感じていたのであります。この感じは学生時代から漠然と感じていた事であり、これを明らかにしたいと思つていたのであります。しかるに明治の終り頃から大正にかけて、偶然にも自分は長い間ぼんやりとして研究し且つ、道を求めていたこと、この歩みは「救済と自証」の問題、これを問題として歩みを進めて来たのであると云う事がはつきりとわかつてきたのであります。年齢では三十代、明治の終りより大正時代にかけて歩いたその到達点が「救済と自証」、こゝまで漕ぎつけた訳であります。或人のすゝめにより論文集の第一巻の出版にあたり『救済と自証』と云う題目を見出したわけであります。私に於てこう云う時代でありました故に当地の講習会に於ても「救済と自証」について御話したわけであります。今日としても問題に変わり無いのであります。この問題をかゝって今まで歩みを進めて来たのであります。（『真宗教学の中心問題』1頁）

資料6

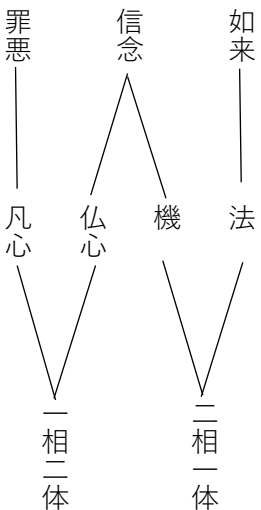
仏は衆生を以て救ひの体とする。自分は仏にならう、一切衆生を救はう、その自覚原理となるのが法蔵菩薩である。法蔵菩薩は我々の代表者か、仏の代表者か、普通は仏の代表者と云はれて来たが決してさうでない。助ける方の代表者は単なる助ける方の代表者ではない。

第十八願に十方衆生とあるが、その十方衆生の中に阿弥陀仏が居るか居ないかが第十八願の問題である。助ける方に属する仏が、助ける方に属する筈はないといふのは単純な見解である。一体之を助けるには助かる身になつて見ねばならぬ。助かる身の中に助ける人を見るのである。

真実助かる身になつて助ける本願が成就されるのである。第十八願の十方衆生とは「我々十方衆生」といふのである。衆生の悩みを我が悩みとして衆生と同じ悩みを持つ、之が阿頼耶識である。『成唯識論』の中に「摂為自体共同安危」とある。即ち衆生をあまねく摂して自の体とする。法蔵菩薩は一切衆生を自己にをさめて自の体とするのである。安危は生死であり、苦楽である。死ぬも生きるも衆生と共にする。自分一人悟りを開かうとするのでなく衆生と共に悟りを開かう——これが法蔵魂である。大乘精神の原理は阿頼耶識である。法蔵菩薩は助ける仏の代表者と一応解釈されるが更に深く掘り下げると我等一切衆生の代表者である。助ける仏の代表者は救ひを求める我等衆生の代表者でなければならぬ。（『講義集』二二二頁）

資料7 一〇一、宗教上の「我」の名字（『選集第四巻』）

私は天親菩薩が『願生偈』の初に「我れ一心に無碍光如来に帰命す」と告白せられし文字を読み、師が明に我の一心帰命なりとの告白を以て、我祖親鸞が他力の一心と決定せられしことに付き、われわれはその観察の深痛を極むるに驚き仰ぐものである。信ずるは我の自力、他力は信ぜらるゝ客境と、かく一往は主客は区別せらるゝが、その実は信ずる「我」そのものが已に他力回向の如来の大我であらせらるゝ。否一心帰命の信念こそ我々の実証せらるゝ唯一の如来の本願力である。信仰は本願の影ではなく、正真の本願力そのものであらせらるゝ。本願力でたすかると云ふは則ち信力でたすかると云ふことである。信力でたすかると云ふはその信力がそのまゝ、願力他力である。祖師が天親菩薩の全我の一心帰命を以てそのまゝ、他力回向の信心と決定し、如来を喚び奉る所の信心を以てそのまゝ如来のわれを呼ぶ所の招喚の御大命と断定せられしは誠に義なきを義とする、深き観察と仰ぐ所である。而して清沢師が「他力救済の念にすくはるゝ」と特に念の一字を加へられた意義を味ふことが出来る。此念とは信念である。空漠なる客観的他力に救はるゝに非ず、主観なる他力回向の信念に救はるゝのである。（中略）



資料8 「久遠の仏心の開顕者としての現在の法蔵比丘」より（大正2年1月）

かく超世の大誓願を深く味ふ時、法蔵比丘は久遠実成の如来の顕現とせねばならぬ。然らば久遠の如来は何故に久遠のまゝの御姿を以てその救済の御本志を一切衆生に顕示し給ふことが出来なかつたのであるか、何故に人間比丘として和光同塵し給ひたのであるか。

凡そ此問題は我他力救済の道に於て至要の問題である。誠に救済の大願は久遠の如来を外にして成就するの能力なきと共に、又久遠の光明のまゝの御姿では此本願は起させらるゝことは出来ないのである。縦令此本願を起し給ひても全く無能力に終るであらう、如来云何ぞ無効の仕事をなし給はんや。かくて如来はその誓願を我々衆生に示さん為に忽然として久遠の光明を和らげ、人間の煩惱の塵に同じて法蔵比丘と降誕して、その久遠の大誓願を表明し給ひた。蓋し人間の救済には先づ人間の主観を親しく実験し給ふの要がある、否人間の御経験が則ち如来の救済の最後の証明である。法蔵比丘降誕の一事、如来が人間となり給ふの一事、此一事が如来の衆生救済の成就にして、又此一事が我々の信念の唯一事件である。法蔵比丘の御相がそのまゝ機法一体の御相であらせらるゝ。此れ則ち人生超越の如来が正しく人生上に来現し給ひたのである。理智の如来が情意の如来となり、法性法身が方便法身となり給ひたのである。私は昨夏加賀の一道友の宅に於て、生来初めて法蔵比丘五劫思惟の聖像を拝し、至純の親心と至純なる子心とを念じ給へるに深く胸を打たれたのである。機法一体の六字名号は已に法蔵降誕の一事実の上に洩なく現はれて居る。本願と云ひ、正覚と云ひ、畢竟法蔵降誕の大精神の説明に外ならぬ。何ぞ徒に本願の文字や十劫正覚に拘執せられて此根本的事実を忘却するや。（中略）

然らば法蔵比丘は決して遠く過去の人ではない。又遥なる浄土の人ではない。彼は近き現在の自己の主観にある。法蔵出現の如来の本願を念ずる時その信念と念仏とは是れ法蔵比丘にて在ますのである。法蔵比丘の本願は帰命

の客観境であるのみならず、直に現に帰命する我等の主観的信念、即ち真実の自我が法蔵比丘の本願である。法蔵比丘の本願とは豈に他あらんや。衆生貪瞋煩惱の願往生心が此である。我等の救主なる法蔵比丘は正しく救はるべき我と一体にして、寧ろ此救はるべく自己を客観に投影する所の真実究竟の自己の主観である。我々は正覺の如来を念ずる時、それが近く此世界に在ますとは思はれない。正覺の如来は遙に穢れたる人生を離れて、純妙の淨国に端坐し給ふとしか思はれない。唯法蔵比丘の本願を念ずる時、和光同塵の如来は近く現に我をして我たらしむる真主観にて在ますに驚く。法蔵比丘の本体や修行は決して昔話ではない、神話ではない。本願の船は現在にある。人生のあらん限り、本願は存在し、法蔵比丘は永久に存在し給ふのであらう。（『選集』二巻372頁374頁）

資料9 一一、如来は最上の自我也

誠に「たのめ」の南無の二字こそは我等の無始以来の迷悶の雲を破り、阿弥陀仏の救済を証明する直接主観の大命である。「如来は我也」と云ひ「如来我となる」とは此南無の二字に接した時の感である。南無の二字は「如来となる」と云ふことである。阿弥陀仏の四字は「我を如来にする」と云ふことである。如来が我になりしは我を如来にするを目的とする為である。而も我が如来になるは現実世界では出来ぬ。現実世界には唯未来成仏を憧憬するより外はない。唯我々の現に実験し得る所は「如来が我となり給ふ」と云ふ南無の二字に過ぎない。人生の大事実は「如来人間となる」と云ふの外はない。如来人間となるとは單に耶蘇となるとか、親鸞となると云ふやうの事ではない。純乎たる靈人法蔵比丘となり給ふと云ふことである。此法蔵比丘となり給ふとは則ち一切の人間の真我となり給ふと云ふことである。耶蘇の誕生も親鸞聖人の誕生も不可思議である。而も我祖聖は自ら特に如来の化身とは仰せられぬ。生涯一凡人として生活し給ひた。此れ凡人の自覺の中心に人間的如来が現在し給ふが故である。我我は唯「如来人間となる」の現証の信念で満足する。此信仰が現在の唯一の救済である。（『選集』四350頁351頁）

資料10（「地上の救主」）

されば法蔵菩薩は決して一の史上の人として出現し給ひたのではない。彼は直接に我々人間の心想中に誕生し給ひたのである。十方衆生の御呼声は高き淨光の世界より来たのではなく、又一定の人格より、客観的に叫ばれたのではない。彼の御声は各人の苦悩の闇黒の胸裡より起つた。法蔵菩薩の本願を生死大海の船筏と云ふは、御呼声が我が胸底我が脚下より起りしことを示すものである。世の一切の理想的宗教が「天の宗教」なるに對して、我法蔵菩薩の救済の宗教のみは、唯一の「地の宗教」であらせらるゝ。「光の宗教」は数多い、「船の宗教」は唯我真宗ばかりである。我真宗のみ現実の宗教、眞の救済の宗教である。平生業成と云ひ、眞俗二諦と云ふは、唯此現実の救済を表明する文字に過ぎぬ。世に何ぞ生死海底に於て、未来の光を讃仰しつゝ、空しく滅び行く人の多きや。誠に我が眞宗は世の多くの讃光の宗教と共に如来の尽十方の光明を讃仰する。而も久遠にして永久なる光明を讃仰する我々は空中に居るのではない。現実の大海の船上に在る。茲に於て我々は唯独り永久滅びない。生的大海の中に居り乍ら、大願船上の人は永く生死を隔てゝ居る。此船を忘るゝ時、我は最早や讃光の人たることが出来ぬ。何となれば現実の我はその久遠の重さに由りて、自然に墮ち行く所まで墮ちねばならぬからである。我は空中の人ではないのである。

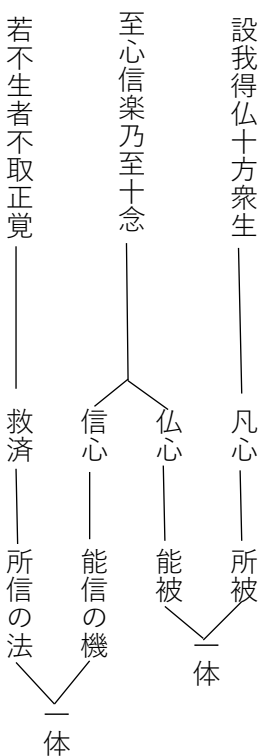
抑も三世十方の諸仏菩薩諸神は皆平等に天より「来れ」と呼び給ふ。彼等は一斉に各特殊の光明を以て我々を照す。而して一切の光明を統一し給ふ炎王光の阿弥陀如来はその至大なるものであらせらるる。されど憧憬と救済とは一つでない。則ち諸神諸仏は我々を捨てずに永久に呼び永劫に照し給へども、無力の我々は現実の自我の救の問題に接し、行足の問題に触るゝ時、我より彼等神仏を捨てて避けねばならぬ。有体に云へば諸神仏には理想的なる呼声は存在すれども、現実の救の本願はないのである。眞の意義に於て、本願は唯法蔵菩薩の四十八願に限るのである。我々は徒に他力救済を軽く考へて居るが、眞の他力とは祖聖の示し給ふ如く「如来の本願力」に限るのである。而して、如来の本願力とは何ぞや。現実によりて自己を救ひ給ふ能力である。徒に美しき画餅ではないかぬ。大悲観音の力は畢竟画餅である。何等の現実の基礎を有せぬ。美しき比喩の外何物もない。法蔵菩薩の本願は全く此と異なりて居る。彼は一面には人間仏としてそのまゝ久遠実成の阿弥陀如来にして、又同時に他の一面にはそのまゝ救を求むる所の自我の真主観であらせらる。私は此理りをば「如来は則ち我也」と表白し、又「如来我となる」と感じたのである。則ち救済主としては機（信念）法（如来）一体の御姿であり、又救済せらるゝ人間としては仏心（信念）凡心（罪業）一体の御姿であらせらるゝ。我々は一箇の法蔵菩薩の上に久遠実成の法身如来の威神力を拝し、又罪業の裡に罪業の自己に覺めて一心帰命する自己の姿を觀る。則ち彼の上に一面に御親の姿を拝すると共に、寵児の姿をも觀る。法蔵菩薩は久遠の父の如来と我々衆生との間の第三者としての仲保者ではなく、一身則ち如来にして則ち我々衆生である。則ち第一者にして則ち第二者である、則ち我々の信念の客体たると同時に、信仰の主体であらせらるゝ。タスケテであつて同時にタスケラレテである。タノミテでありて同時にタノマレテである。船客にして同時に船主である。本願の主人たると共に本願の対機である。私は此法

蔵菩薩の人格と、その御誕生の理由と、誕生の意義とに想ひ至る時、不可思議の驚異と、痛感とに堪へないのである。

私は此不可思議なる法蔵菩薩の御姿に驚く時、則ち久遠の如來の不可思議の御姿に驚き、同時に自己の不可思議の存在に驚くのである。

法蔵菩薩とは何ぞや。他でない、如來を念ずる所の歸命の信念の主体がそれである。彼の第十八願とは如來が親しく能歸の衆生の子心の実験の表白である。第十八願は機の信心を成就し給ふと、祖聖は決定せられたが、全体たのむ機を成就すると云ふことは何である乎。如來が我々の起すべき信心を成就し給ひたとは云何の意味である乎。我々の起すべき願行を成就し給ひたと云ふことは、願行の二者は猶多少客観的であるから、客観的に理解し得るが、正しく主観の自己を離れて、いさゝかも考ふることの出来ない所の信心、自己が親しく如來をたのむ所の現実一念の真主観の信心を客観の如來が代りて成就し給ひたと云ふは云何の意味である乎。凡そ信心こそは我々の純主観の真生命である。是ばかりは客観の如來の方に成就することは出来ない。是れ則ち善導大師や法然上人が、明に三信十念即ち信と願と行（念仏）との三者を以て往生の業因と誓ひ給へる第十八願の中より、信の一つは信念の主観なる故に是を所信の本願より除き、願行具足の名号を以て如來の成就する所となし、「念仏往生の願」と名け給ひし所以である。然るに我が祖聖独り此願を自己の胸底に実験し、直に法蔵菩薩の本願を自己の主観に発見し、此を断じて「至心信樂の本願」と名け給ひたのである。誠に我祖聖は自ら本願の正客であるばかりでなく、本願の主であらせらるゝ。是れ我祖聖の御聖教を弥陀の直説と云ふは決して空漠たる讃辞ではないのである。正しく法蔵菩薩の発願の大精神を御自身の一念の信上に発見し給ひたのである。法蔵菩薩は我々の救主としては直に久遠の如來にて在ます、又至心信樂の実験者として久遠の如來に向はせらるゝ時には直に我々衆生の主観の真我たる信心である。誠に「若くは不生者不取正覺」の誓言は法蔵菩薩が直に自ら久遠光明の父なるを表明し給ひ、「至心信樂、欲生我國、乃至十念」の本命は法蔵菩薩が直に十方衆生の主観に來りて、子たる我々の心行を実験し給ひたるものである。而も欲生の願心や十念の行業は猶是れ我々行者の主観中の客観であるが、獨り至心信樂の信のみは、「如來に我に代る」と云ふよりも、「如來直に我となる」と云ふの外はないのである。而して此信樂の真我の機こそは第十八願の真髓にして、他力本願の救済と云ふは畢竟唯如來直に行者歸命の信念の真主となり給ふと云ふの外はないのである。法蔵菩薩や、その本願を單に客観の所信位に置く様では、猶真実に本願を実験し信樂せられた人とは云へぬではない乎。如來何故に至心信樂の誓を起し給ふや、又云何にして至心信樂の願を起し給ふや、何故に單に念仏往生を誓ひ給はざりしか、此れ深く内観すべき至深の問題でない乎。（中略）

誠に第十八願は法蔵菩薩自ら至心信樂の子心と若くは不生者の親心との一体無碍なるを証明し、親子一体の自覺を以てその人格とすることを表明し給ひたものである。法蔵菩薩は機法一体の御姿である。又信心凡心一体の御姿であらせらるゝ。彼は親しく我々一切衆生の罪業を以て直に御自身の罪業と感ぜ、我等を責めずして直に御自己を責め、此凡心罪業の実験に依りて、至心信樂の子としての信心を産出し、更に至心信樂の信念の実験に依りて、若くは不生者の久遠の親心を創作し給ひたのである。則ち十八願は、



の「二重の一体」に摂尽する。而して此二重一体の中心は云ふまでもなく、信心の機にして而も能被の信心なる至心信樂に存する。如來が我等の真主観の信樂を成就し給うてふ語の意味は誠に甚深微妙である。「法蔵菩薩は如來が直に我となり給ふ御姿也」、而して「法蔵菩薩は自ら如來が衆生となれることの表明」が第十八願である。

久遠の父なる如來は遠劫より現在に罪惡生死の人生海に迷悶しつゝある私を救はんために御身を現実の娑婆海に投じ、直に私の真実究竟の主観となりて、私をして久遠以来無明長夜の夢を破り下された。彼は表面に私を汝と呼ぶと共に、隱彰には私をば直に我と観じ下されたのである。汝の問題は直に我が問題である、則ち汝をして罪業に拘へられしめたは我が責任である、則ち汝の罪業は直に我が罪業である。かくて彼は直に十方衆生の主観の秘密に接触せられた。汝は單なる汝に非ずして乃ち我なりと、茲に至心信樂の心を感じ給ひた。彼の感發はそのまゝ、我等人間の感發である。私の感發の信を離れて彼法蔵菩薩の感發はないのである。五劫と云ひ、永劫と云ふ時、人は唯現在の自我を懸絶したる昔話と思うて居る。けれども法蔵菩薩の至心信樂を感發し給へる一念

は永劫を包容せる絶対の一念である。又私共の感発せしめらるゝ信の初一念と云ふも永劫を含蓄せる絶対の一念である。(中略)

誠に五劫永劫の願行と云ふも、十劫の成仏と云ふも、皆大現在の信の一念中に摂められて仕舞ふ。法蔵菩薩は昔の神話ではない、現在の信の事実である。

畢竟するに光明の憧憬は一切宗教の共通性であつて、他力宗教の特色ではない。我々は真に自己に反る時、讃光の宗教より、乗船の宗教に転ぜねばならぬ。現前脚下の事実に醒めて、自己を生死海底に発見する時、驚くべし自己はその時船上の人である。自己は船客にして又船と船主とが無碍一体なるに驚くであらふ。一念茲に醒むる時、我は始めて静に天上の慧日を讃仰すれば、我亦現に光明中の一人なるに驚く、現実生死の苦海亦理想の光に照されて無限の光海ではない乎。我々は夢の如き讃光者たるべきではない。

法蔵菩薩は永劫の後始めて浄土を建立し給ひたのではなく、彼は願行の念々に新なる浄土と、新なる自我とを創作し給ひた。而して創作せられたる浄土と自我とは亦久遠の如来と同じく、遙遠なる光明土である。唯夫れ今や現実の弘誓の船がある。此船ある限り、安樂浄土は遠くして而も甚だ近いのである。唯至大唯一の問題は浄土や如来の遠近に非ずして、自ら弘願の船を自覺せりや否やに在る。『大無量寿経』に「易往而無人」と歎じ、祖聖が『教行信証』信巻の初に「常没の凡愚、流転の群生、無上妙果の成じ難きには非ず、真実の信樂、実に獲ること難し」と表白し、宗教問題の中心を表白せられたは此所以である。

(六月十七日午後十時稿終)(「地上の救主」『選集』二412—421頁)

資料11 「凡人の右胸より誕生したる如来の宗教」(『選集第二巻』明治43年)

脳より吐き出されたるものは空中の幻影であり、腹より投げ落されたるものは地上の肉団である。永劫の因縁に依りて人間の右胸より誕生したるものは究竟一乗の實在の勢力である。

惟ふに如来の宗教は古今の人類の心胸の独尊の産物である。先づ釈尊に依りて産み出され、龍樹、天親に依りて産み出され、曇鸞、道綽、善導に依りて産み出され、源信、源空に依りて産み出され、親鸞聖人に依りて産み出された。のみならず不孝の子阿闍世太子の母韋提希に依りて産み出され、強賊耳四郎や、親鸞聖人を害せんと企てたる山伏弁円の胸よりも誕生し、その無声無名の尼入道の貪瞋煩惱の心中より出現し給うたのである。摩耶夫人が釈尊の聖母たるが如く、平凡なる一切人類は男となく女となく、悉く尽十方無碍光如来の聖母たるの光榮を有するのである。従来我等は如来を以てわが真実の慈母とし、自己を以て彼の長子であると思ふて居つたのであるが、深く考ふるに我等衆生は驚くべし、大智光明の如来の母であつたのである。子却て親を産み、親却て生の子に済はるゝと云ふことを、想へば誠に神秘驚嘆の至極ではない乎。

資料12 「空中の仏、地上の仏、心中の仏」(『選集第二巻』明治43年)

私は本年一月の本誌上に於て、「凡人の右胸より誕生したる如来の宗教」なる題目を掲げて、『観無量寿経』を讃仰し、私共凡人は遙に絶対なる如来の力を憧憬しつゝ、而も遂に自己中心なる相対他力の域を超越するを得ざることの悲歎を述べたことであつた。而して『観無量寿経』が正しく弥陀、釈迦、及び王妃韋提の善巧の大慈悲より現はれて、深く我等凡人の心胸中に入り、是自己中心の罪惡の尽に、如来の大悲を味ふを得せしめ下されたるを歡喜せずには居られぬのである。誠に『観無量寿経』の旨趣は甚深にして汲めども汲めども尽きぬ。我は茲に再びその卑懷を開陳させて戴かんと思ふ。

観仏の至極を述べたる第九真身觀には詳細に如来の光明相好の美妙を開闡して、次で我等が如来の色相を觀ずるは徒にその秀麗を觀ずるが為ではなく、「以観仏身故、亦見仏心」と、真身觀の究極の目的は如来の大精神に触るゝことに在ると示してある。然らば仏心とは何ぞや、他なし「仏心者、大慈悲是、以無縁慈摂諸衆生」と此十五字は誠に『観経』一部の大精神である。言は極めて簡潔である。而もその簡潔なる所に無限の生命がある。唯此十五字を以て『観経』を見るならば、『観経』一部の文々句々が皆如来大悲の涙の顯現にして、又釈尊の同情の涙の結晶にして、又王妃韋提希の悲喜の涙の痕であることを見るであらふ。

如来は實在せりや、如来の無縁の大悲とは何ぞや。此れ今日の多くの人々の疑問である。否現に私の疑である。否過去の聖賢の疑問であつた。誠に王妃韋提の衷心の疑問であつた。而して釈尊は此に向て高遠なる説明を下し給はなかつた。形而上的空想何の要かあらん、何の功かあらん。韋提は正しく現在の実証を要求して居る。而して実証は正しく韋提の心中に在る。一切衆生は是れ疑見の劔を以て親ら大悲如来を害せんとする阿闍世太子ではない乎、如来の大悲とはかゝる惡子の上に偏に同情の想をそぐ慈母韋提汝自らではない乎、韋提よ、汝が真に惡子を想ひ捨つることの出来ぬことが事実である限りは、汝を救済し給ふ如来大悲の實在は何ぞ疑を容れんや、確証は汝が胸に在り、諸仏如来は今や汝の心想中に入り給へるを見よ。是れ『観経』一部の所説である。而して是経が実功ある所以である。畢竟『観経』は慈母の偏に惡子を感念する事実を以て、如来の大悲を証顯するものである。我等にして一度自己心中の仏を見るならば、地上の仏たる釈尊の教と、空中の仏たる弥陀の救済とを自然に証得することが出来ることを示すものである。

本當の意味の罪惡の自覺といふのは何であるか。罪惡を自覺するといふことは、罪惡を超えてゐる者でなければ罪惡を自覺するといふことはないでありませう。徒らに罪惡の中に身を没頭してゐる者は罪惡を知らない訳でありませう。更に再び罪惡といふものに立歸つて、罪惡全体、一切衆生全体の罪といふものを負うて立つところの大いなる自覺ではないか、かういふ工合に考へらるべきものであらうと思ふのであります。本當に助かるまじき地獄一定の自分だといふことは、罪の極限を超えて更に再び罪の中に立歸つたところに初めて罪の自覺といふものは生ずるものでなければならんと思ふのであります。だからして本當に罪を自覺する、本當に業因並びに業果といふものを自覺するといふことは、之は單なる個人としてさういふことはあるべからざることであります。眞実に自分の罪を自覺するといふことは、之は恐らくは全人的即ち一切人類を内に抱擁したまふところの仏の心である、菩薩の心である。菩薩の心でなければ本當に機の深信といふものは成立すべからざるものであります。吾々はたゞ口にあさましいものでありますとか、聞き覺えた言葉を以て鸚鵡が人間の眞似をするやうに、たゞ教の言葉を覚えて、ちよつと人に向つて何か口上をいふやうな氣持で、私は罪惡の凡夫でありますと云ふ、そんなものは罪惡の自覺でも何でもないと思ひます。本當の罪惡の自覺は法藏菩薩が一切衆生の罪を荷うて、さうして一切衆生のためには自分は永遠に浮ばんでも構はぬ、永遠に沈んでも構はぬ、「仮令身止、諸苦毒中、我行精進、忍終不悔」。一切衆生の罪を荷うて、自分を衆生の中の一人として見出して、一切衆生一人たりとも救はれなければ自分は仏に成らぬ。そこに深い願心の自覺を表はしたものが無有出離之縁、出離の縁あること無しといふ深き悲しみでないかと思ふのであります。

私は「自身は現に是れ罪惡生死の凡夫、曠劫よりこのかた常に没し常に流轉して、出離の縁あること無し」といふ、この無有出離之縁といふ言葉に就いて非常に深き意味を認めなければならんと思ふのであります。一体、仏のお慈悲は無縁の大悲と名づけれます。諸仏菩薩の慈悲は無縁の大悲と名づけるのであります。「仏心者大慈悲是、以無縁慈、摂諸衆生」と『觀無量壽經』の中に説かれて居ります。大慈悲とは無縁の慈悲である、無縁の慈悲とは衆生を摂取したまふ本願である、かういふ工合にお示しになつてゐるのであります。その無縁の大慈悲といふことはどういふことであるか、之を一つ考へて見たいと思ふのであります。

しからば無縁の大悲といふことは何かといふと、私は無有出離之縁の大悲だと思ひます。出離の縁のない大悲であります。こんなことを云つてこじつけんでもよささうなものだ、かういふ人があるかも知れません。けれども私は言葉の約束から云つても、どうしてもさういふ工合に考へなければならんと思ふのであります。無縁の慈悲といふのは、縁無き衆生を救はうといふ慈悲だ、こんなふうにも解釈出来ます。或は無縁の慈悲といふことは、助かる縁手懸りのつきはてた、さういふものを憐れむのが無縁の慈悲だ、即ち助かる方便のつきはてたものを憐れんで、さういふ人のために自分は犠牲にならう。一切衆生を救ふために自分は身を犠牲にして、永遠に浮ぶ瀬のない者を憐れむのを無縁の大悲といふのであります。しかし茲に特に考ふべきことは、大悲の悲といふ文字はどういふ字であるか、それは慈悲の悲である。慈といふ字はいつくしみであり、悲といふ字はあはれむといふことである。かういふ工合に普通云ふのでありますけれども、私は悲といふ字はやはりかなしみである、あはれむとはかなしむなり。悲といふ字は、あはれむとも読み、かなしむとも読むのであります。私は本當にあはれむといふことは、かなしむといふことであると思ふ。自らのかなしみを離れて、他へのあはれみといふことはないのである。だから無縁の大悲といふことは無有出離之縁の大なる悲しみである。大慈悲といふことは單に仏のお慈悲だ、あはれみだといふ。まああはれみに違ひない。さりながらそのあはれみといふものを、もう一遍更に深くその因といふものを求めて見るとかなしみである。本當のかなしみである。法藏菩薩が一切衆生の罪を自分の双肩に荷うて立つて行かれる心持といふものは、もう永遠に浮ぶ瀬がないところの深き悲しみであります。實際にこれ程淋しい心持といふものはないものだと思ひます。之は吾々が機の深信だ、罪惡の自覺だと漠然と云つてゐるだけのことでなしに、どうでもかうでも吾々衆生を救はずはおかぬといふところのその願ひからして、正しく吾々衆生の中に自分の身を投じる、所謂仏が菩薩に成りくだるといふのは是であります。

之はいろいろ昨晚お話して居つたのですが、仏さまが菩薩になり下つたと云つて居りますが、なりさがつたのではない、成り上つたのだ。仏さんが菩薩になつたといふことは一段上つたのだ。單なる仏さまが菩薩仏に成つたのであります。單なる平面的仏さまが立体的になつたのだ、平面の仏は單なる理の仏である、單なる理想の仏である。その單なる理想の仏が現実の仏、事實の仏に成つた。理想の仏にしてしかも同時に事實の仏に成るといふのが、仏が菩薩になるといふことである。仏が菩薩になるといふことは、上のものが下のものになりくだつたやうであるけれども、本當の仏が更に一層伸びんがために縮むといつてもよいのであります。尺取虫が伸びるために縮む如く、彼が因位に下るといふことは更に一層自覺を深めたのであります。今までの仏が更に一步を進め、仏が更に本當の意味の仏に成らう、仏が仏であるといふことを自覺するためには、菩薩として初めて本當の仏たることを自証して行くのであります。仏が仏であるといふことだけでなく、仏が本當の意味の仏にならう、かりそめの仏であるといふことに満足しないで本當の仏たることを自覺しよう、つまり無上仏にならうといふことが菩薩になるといふことであります。

然らば、法蔵菩薩といふのは何であるか、法蔵菩薩はどこにもある訳はないのでありまして、法蔵菩薩はつまり願往生心である。往生の願心が法蔵菩薩である。私はいろいろのことから考へてゆきますと、一体法蔵菩薩法蔵菩薩と云つて外にあるのでない、願求往生の心が法蔵菩薩であります。さうしてみると、願求往生の心が無限に自分に展開して来るところの因果の道程を示すものが機法二種深信といふものだ、さういふ工合に言はなければならぬと思ひます。だからして機法二種深信、信仰といふものは、たゞ個人的の仕事ではないのであります。吾々が本当に正しいところの信仰を求めるといふことは、單なる個人的の自分だけ安心すればよいといふ胡麻化し的主觀的安心を求めてゐるといふことではないと思ひます。宗教的要求といふものは全人類、或は全人格的要求である。つまり全人類、一切衆生を自分の内容として一切衆生の中に自分を見出し、その一切衆生の罪を自分一人で引受けて立つ覚悟であります。一切衆生を救はうなんといふ、そんな上の方から人を見下したやうな心が法蔵菩薩の心ではありません。法蔵菩薩は一切衆生の中に自分の身を投げ込んで、仏が現実の衆生として自覚した、つまり衆生の上に自分を見出した。仏自身が衆生の上に自分を見出したところが願往生といふのであります。衆生の中に自分を見出す時に當つて、本当に一切衆生の救はれるためには自分は永遠に救はれない。もう衆生全体の罪を自分が荷ふ。自分の罪だけを自分が感ずるのでない、個人的の罪を自分だけが痛感する、そんなことが罪の自覚ではない。全人類の罪といふ罪全体を自分一人に荷うてもかうもならぬ。それを荷う限りは自分は永遠に救はれない。その広大無辺な自覚が機の深信といひ罪惡の自覚と名づくべきものでなからうかと自分は思ふのであります。

資料14（『選集』六「歎異抄聴記」―真宗教相の根源としての本願欲生より）
永久に無明の闇に眠っている衆生をして至心信樂に目覚めしめんとして欲生を開顯し給うた。その衆生の信心仏性、永遠にして久遠なる信心仏性をいかに目覚め占めるかという所に仏の五劫思惟の御苦労がある。何故に仏は永劫修行なされたのかというと、衆生の仏性たる信心を目覚ましめる、そうするにはどうしたらよいか。それが仏の問題である。これが五劫兆載永劫の問題である。仏はこの問題のために永劫の間修行された。仏はその本懷を開かんが為に、信樂の中から欲生を開顯せんが為に、五劫の思惟を重ねられた。これを明らかにするのが真宗学である。これ以外に真宗学なし。欲生我国は門である。浄土の東門である。